27　次の文を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〈九州大〉二〇二三年度出題

　人　 小　、精　神 ①専　利、長　　已　、思　慮 ②散　逸、ⓐ固 ③須　早　教、勿　失　機　也。 吾　七　　時、二 「霊　光　　  
賦一、二 於　今　一、十　　　、　不二 遺　一。二　十　之　外、レ 　経　、一　月　廃　、　二 　一 矣。 　二 　一、④失二 於　盛　年一、猶　当二 晩　学一、不レ 可二 自　棄一。 孔　子　、「五　 　レ 『易、三 　二 大　過一 矣。」魏　武・袁　、　而 ⓑ弥　、　皆　 　而　レ ⓒ不レ 倦　也。曽　　七　 　、　二 天　一。荀　　五　、　 遊　、　二 　一。公　孫　　四　十　、　二 『春　秋一、レ 　　二 丞　一。朱　　　四　、　二 『易』『論　語一、　　　二　、　二 『孝　経』『論　語一、皆　　二 大　一。⑤此　並　早　迷　而　晩　寤　也。

　世　　婚　　 、　二 遅　一、因　循　面　、 レ 。 而　　、二 　出　之　一、　而　　、二 レ 　　一。　二 乎　瞑　　而　レ 　一 也。

（『顔氏家訓』による）

（注）　霊光殿賦＝後漢時代の名文の一つ。全部で一三七二文字ある。

理＝おさらいする。

荒蕪＝荒れ果てた野原のように空っぽ。

坎壈＝志を得ないで不遇なさま。

魏武＝三国魏の武帝、曹操。彼は学者としても一流であった。

袁遺＝人名。後漢末期の学者。

曽子・荀卿＝人名、春秋戦国時代の学者。

公孫弘・朱雲＝人名、漢代の学者。

皇甫謐＝人名、晋代の学者。

寤＝目がさめる。

婚冠＝結婚式と成人式。

因循面牆＝壁の方を向いて勉学を怠ること。

秉燭＝灯りを手に持つ。

瞑目＝目をつむる。

問１　傍線部①「専利」、②「散逸」について、この本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の（ア）～（オ）のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

①「専利」　（ア）　とても集中力がある

（イ）　得意なことに偏っている

（ウ）　利益ばかりを考える

（エ）　不安定で傷つきやすい

（オ）　機敏で要領がよい

②「散逸」　（ア）　慎重でありながら大胆

（イ）　楽観的になりやすい

（ウ）　何事にも消極的

（エ）　つい他のことを考える

（オ）　分別を見失ってしまう

問２　波線部ⓐ「固」、ⓑ「弥」、ⓒ「不倦」の読み方を、送り仮名も含めてすべてひらがなで記せ（現代仮名づかいでもよい）。

問３　傍線部③は「すべからく早く教へて、機を失ふことなかるべきなり。」と訓読する。

　　（１）これに従って返り点を記せ。

　　（２）この一文をわかりやすく解釈せよ。

問４　傍線部④「失於盛年、猶当晩学、不可自棄。」について、漢字仮名交じりの書き下し文に改めよ（現代仮名づかいでもよい）。

問５　傍線部⑤「此並早迷而晩寤也。」を、わかりやすく解釈せよ。

◎問６　この文章全体を通して、学びとはいかにあるべきだと考えられているか。句読点も含めて八十字以内で説明せよ。

問７　儒教の経典とされる書物を、次の（ア）～（コ）のうちからすべて選べ。

（ア）『楚辞』　　（イ）『墨子』　　（ウ）『唐詩選』

（エ）『礼記』　　（オ）『老子』　　（カ）『古文真宝』

（キ）『詩経』　　（ク）『書経』　　（ケ）『韓非子』

（コ）『華厳経』

【解答と採点基準】

問１　①＝（ア）　　②＝（エ）

問２　ⓐ＝もとより　　ⓑ＝いよいよ　　ⓒ＝うまざる（あかざる）

問３　（１）＝須二早 教、勿一レ失レ機 也。

（２）＝Ａ幼少期から学問を教え、Ｂ学びの時機を失わないようにする必要がある。

それぞれ同内容可。再読文字「須ラク～べシ（＝～する必要がある、～しなければならない）」の訳ができていないものは全体０。

Ａ＝４／Ｂ＝６

問４　盛年を失ふも、猶ほ当に晩学すべく、自ら棄つべからず。

問５　Ａ学者として大成した人々は皆Ｂ若い頃には迷いがあったが、Ｃ晩年になって目が覚めたように学問に励んだのである。

それぞれ同内容可。

Ａ＝２〔「此レ」の指示内容（＝学者として大成した人々）がないものは減点１。〕

Ｂ＝４／Ｃ＝４

問６　Ａ集中力のある幼少期の学びが重要だ。とはいえ、Ｂ学びの時機は問われない。Ｃ不遇にして学びに専念できないこともあるが、Ｄ学びの時機を逸しても自ら学び続ける姿勢が大切だ。（79字）

それぞれ同内容可。

Ａ＝３／Ｂ＝２／Ｃ＝２

Ｄ＝３〔「学びの時機」は「幼少期」「若い頃」なども可。「学びからかけ離れた姿勢」の説明になっているものは減点２。〕

問７　（エ）　（キ）　（ク）

【書き下し文】

　まれてなるときは、なるも、しては、し、問２ⓐよりらくくへて、をふことかるべきなり。の、「の」をじ、にるまで、にたびむるも、ほせず。十の、誦ずるのは、すれば、ちに至る。れども人にり、問４を失ふも、猶ほにすべく、らつべからず。ふ、「十にしてて『』をべば、以てかるべし。」と。・遺は、いて問２ⓑよし、れくして学び老に至りて  
問２ⓒまざるなり。は十にしてち学び、はにこゆ。は五十にして、めてたりて学し、猶ほとる。は十にして、に『』をみ、を以てににる。もた四十にして、始めて『易』『』を学び、は二十にして、始めて『』『論語』をけ、皆に儒とる。此れびて早くにひたるもくにめたるなり。

　はしてだ学ばざれば、便ちとし、して、亦たと為るのみ。くして学ぶは、のののごとく、老いて学ぶ者は、をりてにくがごとし。猶ほしてるき者にれるなり。

【現代語訳】

　人は生まれてまだ幼少の頃は、精神に問１①とても集中力があるが、成長してからは、  
問１②ついほかのことを考えやすくなり、本来問３（２）幼少期から（学問を）教え、（学びの）時機を失わないようにする必要がある。私は七歳の時に、「霊光殿の賦」を暗誦し、今日に至るまで、十年に一回おさらいするが、まだ忘れてはいない。二十歳をこえてから、暗誦した経書については、一カ月放置すると、すぐに荒れ果てた野原のように空っぽに忘れ去ってしまう。ところが人には志を得ず不遇な時期があり、最も（頭の働きが）良い時期を逸したとしても、やはり遅くからでも学ばなくてはならず、自分から（学びを）捨て去ってはいけない。孔子は言った、「五十歳で『易経』を学べば、（それで）大きな過ちはなくなるだろう」と。魏武・袁遺は、年を取っていよいよ（学問に）打ち込んだが、孔子や魏武・袁遺（の学びの姿勢）は皆若い頃から学び（その後）年を取ってからも投げ出さなかったものである。曽子は七十歳になって（その年で）学び、名声は天下に聞こえている。荀卿は五十歳で、初めて（諸国を来訪して）遊学し、やはり碩儒となった。公孫弘は四十歳をこえた頃に、ちょうど『春秋』を読み、『春秋』を読んだことでついに丞相（の位）に就いた。朱雲もまた四十歳で、初めて『易』『論語』を学び、皇甫謐は二十歳で、初めて『孝経』『論語』（の講義）を受けて、皆ついに立派な儒家となった。曽子や荀卿、公孫弘、朱雲、皇甫謐はそろって若い頃は迷いがあったが（その人の）晩年になって目が覚めた（ように学問に励んだ）のである。

　世間の人々は結婚・成人の時期になってまだ学んでいなければ、年を取ったと言って、壁のほうを向き勉学を怠り、さらに愚かになるだけである。幼少の頃から学ぶ者は、日の出の光のごとく（学ぶことができるし）、年を取ってから学ぶ者は、灯りを手に持って夜（道）を行くようなものだ。それでも目をつむり（何も）見ることがない者よりは勝っているのだ。